大阪地区における成人女性の季節性アレルギー性鼻炎,気管支喘息及びアトピー性皮膚炎の出現頻度について

出典	臨牀と研究(0021-4965)79巻12号 Page2182-2185(2002.12) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2003146417)
著者	岡田美紀　他
調査地域	大阪府
調査時期	2002年
調査対象	大阪大学医学部附属病院看護部勤務の職員
依頼数 回収数（率）	589人 522人（88.6%）
診断方法	独自調査票
有症率	季節性アレルギー性鼻炎：35.2%
調査概要	大阪大学医学部附属病院看護部勤務の職員を対象にした質問票調査である。

山形県内における アレルギー症状有訴者の実態調査

出典	山形県衛生研究所報(0513-4706)34号 Page61-64(2001.12) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2002099069)
著者	山口始　他
調査地域	山形県山形市
調査時期	2000年（1993年にも同調査を実施）
調査対象	小学生、中学生
回収数（率）	579人（男子291人、女子288人） 小学生：391人（男子188人、女子203人） 中学生：188人（男子103人、女子85人）
診断方法	親の申告
有症率	29.4%
学年別有症率	小学生：26.9% 中学生：34.6%
調査概要	山形県の小中学生の花粉症と喘息の調査論文。花粉症有症率は3割前後とほぼ横ばい状態だが、中学生で女子の割合が増加し、春のスギ花粉症に加え、秋のイネ科・ヨモギ科の花粉症の存在が推察された。

アレルギー疾患に関する東京都3歳児実態調査

出典　小児耳鼻咽喉科(0919-5858)22巻1号 Page23-27(2001.07)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/2001262211)

著者　上田隆　他

調査地域　東京都（島しょ地区除く）

調査時期　1999年9月

調査対象　3歳（3歳児健康診査の受診対象者全員）

依頼数　7998人
回収数（率）　4415人（55.3%）
（区部：62.3%、多摩地区：37.4%、男子：51.3%、女子：48.7%）

診断方法　症状が2年以内にある者（現症）と症状が2年以上前にあった者（既往）の合計を有症とし、医師の診断は問わない

有症率　アレルギー性鼻炎：　7.5%（326人）
医師の診断あり・現在症状あり：5.8%（251人）
医師の診断あり・既往あり：　0.3%（13人）
医師の診断なし・現在症状あり：1.3%（55人）
医師の診断なし・既往あり：　0.2%（7人）

男女別有症率　アレルギー性鼻炎：　男子：7.8%、　女子：7.1%

地域別有症率　アレルギー性鼻炎：　多摩地区：8.8%　区部：6.7%

何らかのアレルギー疾患に罹患している者：41.9%（男：45%、女：39%、1850人）

調査概要　東京都の3歳児のアレルギー疾患の実態調査論文。約40%が何らかのアレルギー疾患を有しており、区部より多摩地区でアレルギー性鼻炎の有症率が高いが、性別差はみられなかった。

小学生のスギ花粉症とそれに関連する因子の検討

出典　千葉大学環境科学研究報告(0386-2119)27巻 Page9-14(2002.03)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/2003161113)

著者　島正之　他

調査地域　千葉県君津市

調査時期　1999～2001年の9～10月

調査対象　小学生

依頼数　1999年：1334人
2000年：1265人
2001年：1257人

回収数（率）

	質問紙	採血実施者数
1999年	1330人（99.7%）	1160人（87.0%）
2000年	1263人（99.8%）	1121人（88.6%）
2001年	1251人（99.5%）	1087人（86.5%）

診断方法　ISAAC

有症率

	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年
鼻症状（%）：	25.6%	28.8%	29.0%	27.6%	28.4%
鼻・結膜症状（%）：	11.6%	13.5%	12.9%	12.7%	14.5%
季節性症状（%）：	7.8%	8.4%	11.0%	10.4%	12.7%
スギ抗体陽性（%）：			24.2%	27.5%	33.6%
季節性症状＋スギ抗体陽性（%）：			6.7%	8.3%	9.7%
季節性症状有症者のスギ抗体陽性率（%）：			59.2%	70.1%	75.0%

調査概要　千葉県の小学生のスギ花粉症と関連因子を調査した論文。花粉症は増加傾向、高学年になるほど高率となり、成長と共にスギ抗体陽性率も高くなっており、スギ花粉への暴露が大きく関与していることが示された。

和歌山県下中学１年生のIgE抗体陽性率

出典　耳鼻咽喉科展望(0386-9687)42巻2号 Page183-187(1999.04)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/1999203363)

著者　榎本雅夫　他

調査地域　和歌山県

調査時期　1997年10～11月

調査対象　中学1年生

依頼数　918人（男子460人、女子458人）

診断方法　申告（問診票記載）

有症率　18.1%（現症＋既往）

調査概要　和歌山県の中学一年生のアレルギー疾患とアレルゲン感作率を調査した論文。ダニに感作している人はスギにも感作している割合が高く、アレルギー性鼻炎症状を有する割合も高くなる。

アレルギー性鼻炎の全国疫学調査
全国耳鼻咽喉科医及び家族を対象にして

出典　日本耳鼻咽喉科学会会報(0030-6622)105巻3号 Page215-224(2002.03)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/2002231909)

著者　中村昭彦　他

調査地域　全国

調査時期　1998年

調査対象　全国の耳鼻咽喉科医師とその家族

依頼数　医師9471人
有効回答数（率）医師4035人（42.8%）（医師とその家族あわせて17301人）

診断方法　独自調査票

有症率　スギ花粉症：16.2%
通年性アレルギー性鼻炎：18.7%（全国平均）

調査概要　全国の耳鼻咽喉科医師とその家族を対象にした質問し郵送調査。有病率の地域差や年齢階級別有病率も検討。

京都市小・中学生における アレルギー疾患疫学調査

出典	アレルギー(0021-4884)46巻10号 Page1025-1035(1997.10) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/1998067472)
著者	細井進　他
調査地域	京都府京都市
調査時期	1996年6～9月
調査対象	小学生、中学生
依頼数 回収数（率） 有効回答率	17906人 16176人（90.3%） 95.7%
診断方法	平成7年厚生省長期慢性疾患総合研究事業アレルギー疫学班の基準
有症率	20.3%
学年別有症率	小学生：19.8% 中学生：21.2%
男女有症率比	男：女＝1.3：1
調査概要	京都市の小中学生のアレルギー疾患を調査した論文。約30%が何らかのアレルギー疾患を有し、アレルギー性鼻炎は高学年で増加し、低学年で男子の割合が高く、3割がスギ花粉症であると推察された。

川口・鳩ヶ谷市内小学生のアレルギー性疾患の 有病率と大気汚染の関係についての検討

出典	アレルギー(0021-4884)47巻11号 Page1190-1197(1998.11) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/1999091748)
著者	大山昇一　他
調査地域	埼玉県川口市、埼玉県鳩ヶ谷市
調査時期	1996年5～6月
調査対象	小学生
依頼数 回収数（率）	29274人（川口市：26123人、鳩ヶ谷市：3151人） 25613人（87.5%）
診断方法	川口医師会小児科部会で作成したもの
有症率	鼻結膜炎：22.8%
男女有症率比	男：女＝1.35：1
調査概要	川口市と鳩ヶ谷市の小学生のアレルギー疾患と大気汚染の関連を調査した論文。約44%が何らかのアレルギー疾患を有し、どのアレルギー疾患も大気汚染との明確な関連が認められなかった。

【気管支喘息とアレルギー性鼻炎との関係】
ISAAC study による気管支喘息と
アレルギー性鼻炎の疫学的な調査

出典　アレルギー・免疫(1344-6932)10巻10号 Page1282-1292(2003.09)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/2004069149)

著者　久保田典里子　他

調査地域　福岡県福岡市

調査時期　1995年（2002年のISAAC第Ⅲ相試験の漸定値）

調査対象　6～7歳（小学1年生）、13～14歳（中学2年生）

依頼数　6～7歳：　3137人
13～14歳：　3004人

回収数（率）　6～7歳：　2901人（91.4%、男子：1464人、女子：1437人）
13～14歳：　2831人（94.2%、男子：1452人、女子：1379人）

診断方法　ISAAC

有症率

6-7歳	1995年	現症：25.6%	既往：30.8%
	2002年	現症：32.8%	既往：37.5%
13-14歳	1995年	現症：41.0%	既往：52.6%
	2002年	現症：45.7%	既往：60.8%

調査概要　福岡市の小中学生のアレルギー疾患をISAAC調査した論文。
喘息は高学年で減少していたが重篤な症状は増加し、アレルギー性鼻炎は
高学年で増加しており、どちらも世界平均より高かった。

Prevalence and Prediction of Allergic Rhinitis Using Questionnaire and Nasal Smear Examination in Schoolchildren

出典　Acta Otolaryngol Suppl. 1999;540:58-63.
(http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/10445081)

著者　Okano M　他

調査地域　岡山県

調査時期　1992年、1995年

調査対象　6～12歳（小学生）、12～15歳（中学生）

依頼数　1992年：1092人、　1995年：463人
回収率　1992年：95.6%、　1995年：93.1%

診断方法　その他の調査票

有症率　鼻炎　1992年：26.5%
1995年：22.5%

調査概要　岡山の小中学生を対象としたアレルギー性鼻炎と鼻好酸球量の調査論文。
鼻水の好酸球の増加は鼻炎症状に関与しており、鼻汁のスメア試験は
アレルギー性鼻炎などの有用な指標になる得ると考えられる。

Prevalence and risk factors of allergic rhinitis and cedar pollinosis among Japanese men.

出典	Prev Med. 1998 Jul-Aug;27(4):617-622. (http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/9672957)
著者	Sakurai Y 他
調査地域	関東
調査時期	1995 年
調査対象	鉄道会社従業員
回収数	2307 人
診断方法	独自調査票
有症率	アレルギー性鼻炎：35.5%, 季節性鼻炎：　28.8% スギ花粉症：　11.0%
調査概要	関東エリアの鉄道会社の従業員を対象にした、健康診断時の質問票調査。

ISAAC(International Study of Asthma and Allergies in Childhood) 第Ⅰ相試験における小児アレルギー疾患の有症率

出典	日本小児アレルギー学会誌(0914-2649)16 巻 3 号 Page207-220(2002.08) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2003040155)
著者	西間三馨　他
調査地域	福岡県福岡市
調査時期	1995 年
調査対象	6～7 歳（小学 1 年生）、13～14 歳（中学 2 年生）
依頼数	6～7 歳：3137 人（36 校）、13～14 歳：3004 人（14 校）
回収数（率）	6～7 歳：2901 人（91.4%、男子：1464 人、女子：1437 人） 13～14 歳：2831 人（94.2%、男子：1452 人、女子：1379 人）
診断方法	ISAAC
有症率	6～7 歳　現症：25.6%、既往：30.8% 13～14 歳　現症：41.0%、既往：52.6%
調査概要	福岡市の小中学生のアレルギー疾患を ISAAC 調査した論文。 低学年で喘息・アトピー性皮膚炎が多く、高学年でアレルギー性鼻炎・結膜炎が増加し、どの疾患も世界平均より高率でアジアでは最も高かった。

Does passive smoking affect the incidence of nasal allergies?

出典	Am J Public Health. 1995 Jul;85(7):1019-20. (http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/7604903)
著者	Tsunoda K　他
調査地域	茨城県日立市
調査時期	不詳（1995 年掲載）
調査対象	高校生
有効回答数	1168 人
診断方法	医師の診察
有症率	受動喫煙無：60.7% 受動喫煙有：65.9%
調査概要	茨城県日立市の女子高校生に対する耳鼻咽喉科医による鼻粘膜観察による アレルギー性鼻炎の診断。重度の受動喫煙と有病率の正の関連示唆。

アレルギー疾患の疫学調査
アトピー性皮膚炎は減少している
・姫路市の小学新入生調査から

出典	日本小児アレルギー学会誌(0914-2649)28 巻 1 号 Page50-57(2014.03) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2014224004)
著者	黒坂文武　他
調査地域	兵庫県姫路市
調査時期	1995～2010 年
調査対象	小学 1 年生
回収率	99%以上
依頼数	毎年約 5000 人
診断方法	ATS-DLD
有症率	1995 年：8.6% 2009 年：12.4% 2010 年：11.1%
調査概要	姫路市の小学 1 年生を対象に毎年アレルギー疾患の有症率を調査した論文。 1995～2010 年の間にアレルギー性鼻炎、スギ花粉症の疑いの有症率は有意に 増加し、スギ花粉の飛散増大の影響が疑われた。

長崎県五島地区のアレルギー疾患の実態

出典　小児保健研究(0037-4113)51巻3号 Page361-364(1992.05)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/1993126127)

著者　石橋俊秀

調査地域　長崎県上五島地区

調査時期　1990年10月

調査対象　小学生、中学生

依頼数　4550人
回収数（率）　3795人（83.4%、小学生2380人、中学生1415人）

診断方法　ATS-DLD

罹患率　全体：　12.4%
小学生：12.0%
中学生：13.2%

有症率　全体：　11.9%
小学生：11.5%
中学生：12.5%

調査概要　長崎県上五島地区の小中学生のアレルギー疾患の調査論文。
約40%が何らかのアレルギー疾患を有し、気管支喘息は罹患率も寛解率も高く、アトピー性皮膚炎と蕁麻疹以外は男子の罹患率が高い。

A 13-year Study of Japanese Cedar Pollinosis in Japanese Schoolchildren.

出典　Allergol Int. 2008 Jun;57(2):175-80.
(http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/18427167)

著者　Ozasa K　他

調査地域　京都府

調査時期　1994 ～2006年

調査対象　6～12歳（小学生）、12～15歳（中学生）

依頼数　275 ～510人
回収率　1994年：98.0%、1995 ～2006年：79.0 ～87.0%

診断方法　その他の調査票、血液検査

有症率　花粉症 12.7～23.6%

調査概要　京都の小中学生を対象としたスギ花粉症の13年間の調査論文。スギ特異的IgE抗体値は、花粉量が多い時や11月～1月生まれで高くなり、特に12歳～14歳では非特異的IgE抗体値と共に高くなっていた。

地域別データ比較

（地域）	（調査時期）	（調査対象）	（アレルギー性鼻炎有症率）
新発田市	1992 年	幼稚園児	9.9%
		小学生	18.5%
		中学生	20.0%
東京都豊島区	1984～1985 年	0～5 歳	5.2%
東京都大島	1981 年	2 歳～中学生	23.7%
島根県	1990 年	0～6 歳	3.9%
中国郊外	1992 年	12～20 歳	2.7%
ノルウェー	1993 年	7～12 歳	20.6%

調査概要　新発田市の幼稚園から中学生までのアレルギー疾患の調査論文。
約 40%が何らかのアレルギー疾患を有し、アレルギー性鼻炎、花粉症は高年齢で有症率が高くなっていた。

新発田市における
小児のアレルギー性疾患保有状況

出典　新潟県立新発田病院医誌 5 巻 1 号 Page6-9(1999.11)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/2000122395)

著者　田口哲夫　他

調査地域　新潟県新発田市

調査時期　1992 年

調査対象　幼稚園児、小学生、中学生

依頼数　9684 人（幼稚園児：403 人、小学生：5961 人、中学生：3320 人）
回収数（率）　9221 人（95%）
幼稚園児：380 人（94%）、小学生：5780 人（97%）、中学生：3061 人（92%）

診断方法　医師によりアレルギー性疾患と言われたことがありますか、に「はい」と回答

学年別有症率

	アレルギー性鼻炎	花粉症
4 歳児：	9.4%	0.6%
5 歳児：	10.6%	0.5%
小学 1 年生：	16.0%	1.2%
小学 2 年生：	15.4%	1.8%
小学 3 年生：	19.2%	1.5%
小学 4 年生：	15.6%	1.3%
小学 5 年生：	23.7%	3.7%
小学 6 年生：	20.3%	2.9%
中学 1 年生：	23.7%	3.1%
中学 2 年生：	18.5%	5.0%
中学 3 年生：	17.6%	4.1%

何らかのアレルギー性疾患の有病率：45%（幼稚園児：48%、小学生：47%、中学生：40%）

アレルギーの臨床に寄せる
児童生徒における鼻アレルギー有病率の性差

出典　アレルギーの臨床(0285-6379)16巻3号 Page221-223(1996.03)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/1996119469)

著者　三邉武幸　他

調査地域　北海道白老町

調査時期　1989年7月6～8日、1990年5月31日～6月2日

調査対象　児童・生徒

依頼数　1850人（男子：903人、女子：947人）

診断方法　鼻アレルギーは、医師の診断、鼻アレルギー3徴（くしゃみ・鼻汁・鼻閉）
のうち2つ以上の症状
スクラッチテスト1種以上に陽性反応を示す

有症率　鼻アレルギー：4.4%（82人）

男女別有症率　鼻アレルギー：男子：5.4%（49人）、女子：3.5%（33人）

スクラッチテスト1種以上陽性：
708人、そのうち鼻アレルギーの症例数は82人（11.6%）

男女別スクラッチテスト1種以上陽性：
男：412人、そのうち鼻アレルギーの症例数は49人（11.9%）
女：296人、そのうち鼻アレルギーの症例数は33人（11.1%）

調査概要　小中学生を対象とした鼻アレルギー有病率の性差についての論文。
鼻粘膜局所における過敏性を表す数値（有症率：鼻アレルギー診断症例数／
スクラッチテスト陽性例数）に性差はみられなかった。

小学生・中学生における鼻アレルギーの性差

出典　性差医学(1343-4489)5号 Page86-88(1999.02)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/2003292913)

著者　三邉武幸　他

調査地域　北海道白老町

調査時期　1989～1991年

調査対象　小学生、中学生

依頼数　2677人（男子1300人、女子1377人）

診断方法　・アンケート項目の中で鼻アレルギーの三徴（くしゃみ、鼻汁、鼻閉）のうち、
”いつも””時々””まれに””なし”のうち”いつも”あるいは”時々”
と回答しているものを症状有りとし、二つ以上の症状を有した者
・鼻鏡検査所見から、鼻アレルギー特有の鼻内所見のあった者
・スクラッチテストにて、ハウスダスト（HD）、ダニ、スギの3種の
アレルゲンのうち1種類以上に陽性反応を示した者
＊鼻アレルギーと診断された場合に有病率とし、
鼻アレルギーと診断された症例数／スクラッチテスト陽性例数を有症率
とした

有症率　鼻アレルギー有病率：4.5%
鼻アレルギー有症率：12.6%

男女別有症率

	男	女
鼻アレルギー有病率	5.3%	3.8%
鼻アレルギー有症率	12.3%	13.0%

スクラッチテスト陽性率　全体：35.8%
男子：43.0%
女子：29.0%
＊ほとんどがハウスダストとダニに対する皮膚反応であった

調査概要　小中学生を対象とした鼻アレルギーと性差についての論文。
スクラッチテスト陽性率及び鼻アレルギー有病率共に男子が有意に高いが、
有症率（鼻アレルギー診断症例数／スクラッチテスト陽性例数）に差は
なかった。

大学生における杉花粉症の頻度並びに在学中の有病率の推移に関する7年間の調査成績

出典　アレルギー (0021-4884)45巻4号 Page378-385(1996.04)
(http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/8687285)

著者　中村 晋

調査地域　大分県

調査時期　1988-1994年

調査対象　大分大学新入生

有効回答数　1988年：892人、1989年：761人、1990年：817人、1991年：825人、
1992年：907人、1993年：927人、1994年：850人

診断方法　独自の質問票

有症率　スギ花粉症　1988年：12.0%
1989年：16.6%
1990年：15.5%
1991年：16.1%
1992年：15.7%
1993年：17.4%
1994年：14.7%

調査概要　大分大学新入生の入学時の定期検診時の調査票結果と血液特異的IgE抗体価検査結果によるスギ花粉症有病率の経年変化。花粉飛散数との関連を示唆。

鼻アレルギー疫学調査より・第5報

出典　耳鼻と臨床(0447-7227)49巻Suppl.2 PageS153-S162(2003.09)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/2004124324)

著者　三好彰　他

調査地域　北海道白老町

調査時期　1989年7月6日～8日
1990年5月31日～6月2日
1991年6月27日～29日

調査対象　小学1年生
小学4年生
中学1年生

依頼数　2677人
有効回答数　2615人（白老地区：1286人、荻野地区：863人、竹浦・虎杖地区：466人）

診断方法　鼻鏡検査による診断、くしゃみ・鼻汁・鼻閉のうち2つ以上を持つ、スクラッチテストにてハウスダスト･ダニ・スギのうち1種類以上のアレルゲンに陽性反応を示す

有症率　アレルギー性鼻炎　白老地区：4.7%
荻野地区：4.4%
竹浦・虎杖地区：3.9%

スクラッチテストの結果　白老地区：37.1%
荻野地区：35.3%
竹浦・虎杖地区：31.8%

調査概要　大気汚染がスギ花粉症などアレルギー性鼻炎増加の原因であるという仮説の検証論文。仮説は立証されず、アレルギー性鼻炎の頻度はアレルゲンの暴露量と暴露時間の影響を受けていることが確認された。

福岡市内の経年的疫学調査

出典	日本小児アレルギー学会誌(0914-2649)21巻5号 Page739-742(2007.12) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2008171760)
著者	小田嶋博　他
調査地域	福岡県福岡市
調査時期	1981年～2006年（1997年、2000年、2002年を除く）
調査対象	小学生
依頼数	記載なし
診断方法	ATS-DLD
有症率	累積罹患率：17.6%（経年変化なし）
男女有症率比	男：女＝1.5：1
調査概要	福岡市の小学生のアレルギー疾患を経年的に調査した論文。 1982年～2006年の間、喘息、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎の 有症率に有意な増加はみられないが、アトピー性皮膚炎は減少傾向にあった。

西日本小学児童のアレルギー疾患罹患率調査

出典	日本小児アレルギー学会誌(0914-2649)7巻2号 Page59-72(1993.05) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/1994037352)
著者	西日本小児気管支喘息研究会・罹患率調査研究班
調査地域	福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県、大分県、宮崎県、山口県、 沖縄県、兵庫県、香川県
調査時期	1982年
調査対象	小学生
依頼数	55388人
回収率	96.5%
診断方法	ATS-DLD
有症率	15.89%
男女別有症率	男：19.22%　　女：12.49%
調査概要	西日本の小学生のアレルギー疾患の調査論文。約30%が何らかのアレルギー 疾患を有し、都市部や家族歴を有する場合に多く、アレルギー性鼻炎・結膜炎、 花粉症は高学年で多く、アトピー性皮膚炎以外は男子に多い。

調査概要　福岡市の小学一年生の15年間のアレルギー疾患の調査論文。
アレルギー性鼻炎の累積罹患率に経年的変化は認められなかった。
アトピー性皮膚炎以外は男子のほうが高率であった。

同一地域，同一調査法による 15年間のアレルギー疾患の変化

出典　アレルギー(0021-4884)48巻4号 Page435-442(1999.04)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/1999206981)

著者　松本一郎　他

調査地域　福岡県福岡市

調査時期　1981～1995年

調査対象　小学1年生

依頼数　各年度平均：533人（総対象者数：8000人）
回収率　各年度：95%以上

診断方法　ATS-DLD

有症率　13.2%

年度別有症率
1987年：12.2%
1988年：14.2%
1991年：11.6%
1992年：13.5%
1993年：12.2%
1994年：13.5%
1995年：15.1%

男女別有症率	男平均：16.5%	女平均：9.8%
年度別有症率		
1987年：	14.9%	9.7%
1988年：	16.2%	12.1%
1989年：	15.6%	7.6%
1992年：	17.0%	9.5%
1993年：	16.0%	8.6%
1994年：	16.9%	10.4%
1995年：	18.8%	11.4%

アレルギー性鼻炎で血清 IgE が 300U/ml 以上の者：
69.7%：東京都杉並区（46/66 人）
69.0%：静岡県清水市（40/58 人）
63.6%：神奈川県愛川町（7/11 人）

調査概要　居住環境（東京都杉並区、静岡県清水市、神奈川県愛川町）とアレルギー症状の関係の調査論文。アレルギー性鼻炎有症率と非特異的 IgE 抗体値は愛川町が最も低く、居住構造の差は小さかったが居住地域差があった。

Relationship between housing environment and allergic symptoms of children using ATS-DLD questionnaires.

出典　The Tokai Journal of Experimental and Clinical Medicine(0385-0005)
10 巻 1 号 Page51-60(1985.04)
(http://search.jamas.or.jp/link/ui/1987102645)

著者　Osaka F　他

調査地域　東京都杉並区、静岡県清水市、神奈川県愛川町

調査時期　1981 年 11 月～1982 年 2 月

調査対象　小学生

依頼数　1851 人：東京都杉並区 2 小学校
2287 人：静岡県清水市 2 小学校
1186 人：神奈川県愛川町 1 小学校：

回収率　97.7%：東京都杉並区
96.4%：静岡県清水市
96.3%：神奈川県愛川町

診断方法　ATS-DLD

有症率　アレルギー性鼻炎　15.8%：東京都杉並区（286/1808 人）
15.7%：静岡県清水市（345/2203 人）
8.5%：神奈川県愛川町（98/1149 人）

血清 IgE 測定（RIST 法）が 300U/ml 以上の者：
55.8%：東京都杉並区（91/164 人）
49.1%：静岡県清水市（81/165 人）
40.4%：神奈川県愛川町（36/89 人）

Trends of allergic symptoms in school children: large-scale long-term consecutive cross-sectional studies in Osaka Prefecture, Japan.

出典　Pediatr Allergy Immunol. 2011 Sep;22(6):631-7.
(http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/21466587)

著者　Yura A　他

調査地域　大阪府

調査時期　1975～2006 年

調査対象　7～12 歳

依頼数（回収率）
1995 年：520476 人（95.3%）
1997 年：489725 人（93.6%）
2000 年：468083 人（93.5%）
2003 年：475639 人（93.2%）
2006 年：490505 人（92.2%）

診断方法　その他の調査票

有症率　鼻炎：
1983 年：12.3%
1991 年：16.7%
1993 年：21.6%
2003 年：25.4%
2006 年：24.7%

調査概要　大阪の小学生を対象としたアレルギー症状の長期的調査論文。
何らかのアレルギー症状を有する割合は 45%前後で、高学年になるにつれて通年性と季節性のアレルギー性鼻炎の有症率が増加していた。

平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金
難治性疾患等政策研究事業
免疫アレルギー疾患等政策研究事業　免疫アレルギー疾患政策研究分野

「アレルギー疾患対策に必要とされる疫学調査と疫学データベース
作成に関する研究」研究報告書

発　行　　平成 28 年 3 月 31 日
発行者　　東京都立小児総合医療センター　アレルギー科
赤　澤　　晃
〒183-8561 東京都府中市武蔵台 2-8-29

201511001A（資料集）

厚生労働科学研究費補助金

難治性疾患等政策研究事業

（免疫アレルギー疾患等政策研究事業

（免疫アレルギー疾患政策研究分野））

アレルギー疾患対策に必要とされる疫学調査と疫学データベース作成に関する研究
資　料　集

平成 27 年度　総括・分担研究報告書

研究代表者　　赤澤　晃

平成 28（2016）年 3 月

厚生労働科学研究費補助金

難治性疾患等政策研究事業

（免疫アレルギー疾患等政策研究事業

（免疫アレルギー疾患政策研究分野））

アレルギー疾患対策に必要とされる疫学調査と疫学データベース作成に関する研究
資　料　集

平成 27 年度　総括・分担研究報告書

研究代表者　　赤澤　晃

平成 28（2016）年 3 月

資料集　目次

1. 成人気管支喘息 …… 1
2. 小児気管支喘息 …… 15
3. 食物アレルギー …… 87
4. アトピー性皮膚炎 …… 113
5. アレルギー性鼻炎 …… 167